

# 「ゴビターン・プロジエクト物語」

増田直也



コアジサシ

## 2001年、鳥類調査の日

2001年6月10日、僕は大田区地先の埋立地、昭和島と羽田空港の間に残された森ヶ崎の鼻と呼ばれる大きな干潟の鳥類調査を行っていた。

その日は海風が優しく顔にあたって気持ちの良いべた風の日だった。かつて海水浴場などで賑わった事もあるこのあたりの海は昭和30年代後半から40年代にかけて埋め立てられ、広大な干潟や浅瀬は消滅していった。水辺は遠くなっていた。

リトルターン（英名）＝コアジサシは遠くオーストラリアやニューギニアなどから子育てをする為に日本にやってくるカモメの仲間で、その姿は水辺の妖精と言われるほど優美である。玉砂利の川原や砂浜などにおわんくらいの浅い穴を掘っただけの簡素な巣をつくり、タカの仲間やカラスなどの外敵がやってくると雛や卵を守るために集団で攻撃する。そのため、営巣地は広く（最低でも1ヘクタール×100m×100m）そして視界が良い空間（裸地）が必要である。

しかしそういった本来の営巣地は、開発やレジャーで失われていき、コアジサシは環境省のレッドリスト（絶滅が危ぶまれている生き物の指標）で絶滅危惧Ⅱ類（絶滅希少種）に指定されている。

最近では埋め立て途上の砂礫地や偶然出来た広い空き地、果ては使用されていない駐車場などでの営巣が確認されているが、そういった場所も恒久的な営巣地ではない。

その日もコアジサシは干潟の浅瀬で餌の小魚を捕えるため、ホバリング（停空飛翔）しながらダイビングを繰り返していた。しかし、いつもは羽田空港方面に餌をくわえて飛んでいったコアジサシが僕の頭をかすめて、昭和島の方に飛んでいく。

野鳥と飛行機との衝突事故対策で空港での営巣が難しくなったからなのか、それにしてもこのあたりの埋め立て地に営巣できそうな場所は思い当たらなかつた。

調査を終えるとコアジサシを追いかけて車を走らせた。ここ日本最大の下水処理場、森ヶ崎水再生センターの水処理施設には広大な屋上がある。まさかとは思ったが屋上へ上がるスロープを車で登りきった。

そこには陽炎の立つ、コンクリートむきだしの灰色の空間が広がっていた。そのなかに白い綿菓子のようなものが点々と浮かび上がって見えた。望遠鏡で覗いて見ると陽炎の中にコアジサシが点々と座っている。卵を抱いているのだ。「こんなところぞ！」という言葉が頭のなかを駆けめぐった。



森ヶ崎水再生センター



コンクリートむきだしの屋上でうづくまる雛（中央）



簡素なコンクリート上の巣

翌日、屋上での様子を東京港野鳥公園でレンジャーをしている林英子さんや行徳野鳥観察舎の蓮尾純子さんに電話で話をすると、とても驚いて「屋上での営巣は日本では初めての出来事だろう」と興奮が伝わってきた。

その年の夏は東京港野鳥公園のレンジャーを中心に森ヶ崎水再生センターの職員も加わって約7ヘクタールもある屋上営巣地の調査にあけくれた。

そこで目撃したものは、コンクリートの上に産み落とされた卵が飛ばされて割れたり、巣から離れて親鳥が見放してしまった卵だった。それでも孵化する雛がいて、灼熱に喘ぎながら親鳥を待ち続けていた。歩けるようになった雛は周囲の草むらにひっそりと身を隠していたが、褐色の雛を夏枯れの草むらから探し出すのは容易ではなかった。

そんな状況を見かねて、東京都と大田区に『卵が飛ばされないよう砂利を敷いて欲しい』という趣旨の要望書を提出するとともに、マスコミにも情報を流した。

新聞社の反応は早く、さつそく読売新聞の記者が取材に来了。記事が掲載されたのは6月21日で『転がり割れる卵続出』という衝撃的な見出しと割れた卵の写真には強いインパクトがあった。それを見たNHKのニュースキャスターが取材にきて、屋上のコアジサシの惨状は朝のNHKニュースで日本中に放映された。しかしながら当面の対応策は難しく、その年幼鳥となって巣立ったのはわずかに5羽のみであった。

その年の年末から翌年のはじめにかけて、東京都下水道局、大田区、自然保護団体（後にリトルターン・プロジェクトと命名）の話し合いがじっくりと行われた。この会議にはコアジサシの研究者であり屋上営巣の可能性を追っていた早川雅晴さんも参加した。早川さんは屋上営巣したコアジサシの仲間をフロリダまで視察に行くほどの行動派であり、その専門知識は暗中模索だった私達を一気に勢いづかせた。コアジサシの生態から営巣地の素材、広さ、外敵を防ぐ為のシェルターの開発など、その知識は縦横無尽だった。面積は出来るかぎり広い方が良いと言う早川さんの意見が反映され、約2ヘクタールがコアジサシの営巣地として「実験的」に整備されることになった。

建物の屋上に営巣地を作る試みは東京港野鳥公園のネイチャーセンターで実験されたことがあるが、面積が狭く成功しなかった。2ヘクタールもの巨大屋上営巣地は世界でも初めてのことである。

## 2002年、日本初の屋上営巣地造り

整備作業はコアジサシが飛来する4月初旬前の3月末の休日に集中して行われる事になった。砂利の代わりに使われる素材は下水の汚泥を高熱で処理した、下水道局のリサイクル商品スラッジライトである。スラッジライトは観葉植物などを栽培する時に使うもので保湿性がよく、粒状で扱いやすい。水色の1トン袋が屋上にたくさん置かれていたが、それがスラッジライトだとは気がつかなかった。

この素材を営巣地に使用するに当たっていくつかの問題点が指摘された。比重が軽いので浜風で飛んでしまわないか。レンガ色をしているので乳白色の卵が目立ち、カラスに捕食されないか。などである。いつの間にかスタッフには様々なジャンルの職業者が集まっていた。その中に五洋建設で干潟造りの研究をしていた中瀬浩太さんがいた。

たった5羽のコアジサシが巣立ったその年の晩秋、多摩川下流を船から視察するというイベントに参加した。屋上営巣地は羽田空港をまたげば多摩川河口という立地になっており、そこには大小の干潟が点在している。営巣地のコアジサシたちが空港を飛び越して下流の浅瀬で餌をとるだろうということは一目瞭然だ。

船は下流の干潟や葦原をウオッチングしつつ進んだが、かつて川べりを薄紫に染めていた絶滅危惧種の植物、ウラギクの姿はほとんど見当たらなかった。その船に偶然、中瀬さんが同船していた。

下船したコンクリート護岸の上から川面を眺め、缶コーヒーを飲みながら屋上営巣地の話をした。「スラッジライトが風に飛ばされてしまうかも知れない。どうしたらよいだろう。」と唐突な質問に「それでは柵のようにスラッジライトを囲えば」という答えが即座に返ってきた。その案は下水道局も考えていて、10m角を下水汚泥のリサイクル商品、メトロレンガで囲うことになった。人間の塵、芥の下水汚泥が生まれ変わって絶滅危惧の生き物を救う材料となる。これは良いストーリーだ。

色の問題はスタッフ間でも様々な案が出された。コアジサシは巣のまわりに貝殻を敷く習性がある。この貝殻をばら撒けばカムフラージュにはもってこいだ。しかし2ヘクタールもの面積をカムフラージュするには試算で約30トンもの貝殻が必要だった。そんな膨大な量の貝殻がいったいどこにあるのだろう。皆途方にくれた。

困った時はネットだとひらめいたのが、町工場を経営している田中良平さんだった。富津にある水産加工業協同組合というところで貝殻を無償でもらえるらしいという情報を持ってきてくれた。しかし30トンもの貝殻をいっただいどうやって運ぶのか。このピンチを救ったのが中瀬さんだった。勤務先の五洋建設にかけあつて運転手つきの20トントラックと10トントラックを一日チャーターしてきてくれたのである。貝殻を1トン袋に入れやすくするための道具は田中さんの工場で作り、

袋につめてトラックに積み込む部隊と、クレーンで屋上に上げるのを誘導する部隊の二班にわかれての作業だった。ところが袋に貝殻がうまく入らず、トラックは2往復することになった。2便が到着したのはもう夕暮れに近かった。

もう一案は乳白色のペンキを直に塗装してしまおうと言うもので、これは関西ペイント(株)に勤務している津村昌伸さんの提案だった。これも津村さんが会社にかけてくれた、塗装専門の社員まで動員してくれることになった。この二案によって色の問題は解決した。

さらに猛禽類やカラスに雛が襲われた時の逃げ場として、早川さん考案のシェルターなるものを200個設置することになった。これは45cm×90cmの鉄製の網をメトロレンガで固定するものである。さっそく田中さんの工場で作ることになった。

フオーククリフトが1トン袋に入ったスラッジライトを灰色の空間に山積みにしていく。いくつもできたレンガ色の小山の周りをメトロレンガの枡が囲う。下水道局の作業員がスラッジライトをトンボで敷きならす。殺風景だったコンクリートの屋上はたちまち赤茶い絨毯を敷いたような空間に生まれ変わっていった。

2ヘクターは予想以上に広い。そこに貝殻を撒いたり、白いペンキを塗ったり、シェルターを配置したりする作業は並たいていのことではない。多くのボランティアの手が必要だった。

自然保護団体の会誌で呼びかけるにはその原稿締め切りはとうに過ぎていたが、WWFジャパンや東京港野鳥公園のメールマガジンにはまだ間に合うようだった。またボランティア情報のサイトなども見つけ出して掲示板に書き込みをした。

チラシを作り、大田区の図書館や文化センターなど人が集まる場所に置いてまわり、下水道局や大田区の職員にもチラシを回覧してもらった。

地元の自然保護団体の集まりや東京港野鳥公園などでの配布、果ては行きつけの歯医者さんの受付にまで置かせてもらった。スタッフの予想ではボランティアはそう集まらないだろう。来ても20人〜30人くらい。僕もそう思っていた。

その時作ったボランティア募集のキャッチコピーは、『「コアジサシの子育てをたすけるため、貝殻まきを手伝ってくださいませんか!」』である。集まったボランティアの中には、コアジサシをコアザラシと勘違いした人がいた。コアジサシの認知度が低く、貝殻とイメーじがうまく結びつかなかったのだろうか。また「パーッと貝殻を撒いてみたい!」という人もたくさんいた。

皆の予想に反してボランティアの応募は増えていった。特に若い女性が多く、「子育てをたすけるために貝殻まきをする!それも屋上で」という荒唐無稽な話はおとぎの国の出来事のように彼女たちを惹きつけたようである。

スタッフだけで、作業が始まる前に貝殻撒きの練習をした。用意した100円ショップで買った花柄のバケツから貝殻を撒き散らすと、自然の海岸のように美しくなった。

ペンキ散布も長袖のつなぎに軍手という完全装備で、用意してくれたコンプレッサーの散布機で塗装した色の感じを見た。赤茶けたスラッジライトがたちまち雪が降ったように白くなっていった。

田中さんの工場で作られた雛のシェルターも到着した。レンガを置いた上に金網を置き、そのうえをレンガで固定すると雛が入るのに調度良い隙間ができた。金網にしたのは雛が明かりを求めて出口付近に出て来てしまおうのを防ぐためだ。

この頃から新聞やテレビを見た報道陣などの取材攻勢が始まる。特集で雛の成長を追いかけて随時報道してくれたNHKの「首都圏ネットワーク」、TBSの「ニュースの森」そして極めつけはテレビ朝日の「素敵な宇宙船地球号」だ。30分番組でボランティア作業から雛の巣立ちまでを追うということだった。

テレビ放映の相乗効果もあり、ボランティアの応募は日増しに増えていった。FAXでの応募も併用したため、家の電話が鳴りっぱなしという嬉しい悲鳴をあげる余裕もなく、ボランティア保険担当の新田さんに転送する作業に追われた。

ボランティアを迎える準備も大変だった。立ち入り禁止区域であり、遅れた人は入れない。営巣地から20分も歩かなければならないトイレ。それも男の職場だけに男子専用。手を洗う場所すらない屋上だ。病人や怪我人の対応をどうするか。汚れる作業に着替える場所はどのようななど。

それらの難問に水再生センター側は積極的に答えてくれた。着替え用のテント。手洗い用の水タンクをつんだ車の配車、トイレも1階と2階で男女別に、作業の道具類も大田区が公園管理事務所などからかき集めて来てくれた。シャベル、リヤカー、台車、バケツ、トンボ、ゴミ袋まで。

モノレールが次々と昭和島駅に到着する。駅からはそのままセンター内に入れるのである。

さっそくスタッフが受付に案内する。年齢のご夫婦、見るからにアウトドア風の男性。リュックにはスコップまでついている。

ヘルメットを着用した参加者の前で僕はトランジスタメガホンで挨拶をさせられた。長すぎないように。作業説明をスタッフから、そして水再生センターからは禁止事項などの説明がされる。

いよいよスロープを登っていく。「この坂の上の屋上は？はたして。」参加者の胸も躍っていたのではないだろうか。水再生センターが描いた白い誘導線の上を歩いていくと、羽田飛行場に着陸するジェットの轟音が聞こえてきた。

そのむこうの広がりには赤茶けたスラッジライトの山が見える。

現場へ到着。

真剣に見守るボランティアを前にして貝殻の撒き方を実演しているのは真っ赤なジャンパーに真っ赤な口紅が映える大田区職員の山田さんだ。趣味がトリアスロンというだけあって撒き方も豪快。

シェルターは金網を裁断した田中さん自らが、怪我防止の皮手袋をして設置して

みせる。いよいよ作業開始だ。貝殻を積んだ台車を活きの良い学生風が風を切るように僕の前を押しして行った。



スラッジライトを敷きならす



ペンキ塗り作業



スラッジライトに覆われた屋上

## 「コアジサシがやってきました！」

春の気配はどこからともなくやってくる。それは潮風の匂いだったり、波に反射する陽の光だったりする。

昭和島と羽田空港の間にある浅瀬にもカモやカモメの数がめっきり少なくなっていた。

コンクリートで覆われた水再生センターの屋上にも春の使者、ツバメが雲の中から舞い降りて来た。

3月16日から始まったボランティア作業も延べで200名もの参加者があり、順調に進んでいた。貝殻撒きやシエルターの設置作業も7日間のスケジュールを前倒して6日間で終わり、あとはコアジサシの飛来を待つばかりだった。

ほっと一息つくくと、次はもし来なかったらどうしようと言う不安に支配された。それは積極的に事業を推進してくれた下水道局や大田区の職員も同じだったと思う。4月16日、今年初のコアジサシ確認第一報は東京港野鳥公園の林レンジャーからあり、20日に屋上営巣地を見に行った。営巣地上空に姿は見られなかったが、森ヶ崎の鼻干潟にはすでに100羽ほどの群れが飛んでいた。手招きしても来るはずはなかったが、心のなかでは呼んでいた。「みんなの力で作った良い営巣地があるよ。こっちへおいで！」と。

コアジサシより前に営巣地にやってきて巣作りを始めた者がいる。同じような環境で子育てをするシロチドリだ。生まれてまもなく素早く走り回る。その姿があまりに一生懸命で、いつも冷静な林レンジャーが「可愛いー！」を連発。屋上営巣地に初めて誕生した命に皆の心は癒された。

5月になると、10〜20羽のコアジサシが営巣地上空を旋回するようになった。干潟に出ると何百羽と飛来していて、昭和島付近の浅瀬で優雅なダイビングで魚をしとめていた。その群れはさらに北上するものだったらしく、屋上で初めて営巣が確認されたのは5月18日だった。

その日は肌寒いくらいだったが、いつものように営巣地を見下ろす高台から望遠鏡で柀目の中を丹念に探していく。貝殻とレンガの中に綿雪が降ったようにふんわりとしたもの。そこに卵を抱く親鳥を見つけた時、去年の無機質な炎天下での光景が浮かんできた。

5月下旬になると100羽ほどが次々に卵を産み始め、私達は調査の為、聖域に足を踏み入れた。この頃にはシロチドリと同じ仲間のコチドリも卵を産み始めていた。卵も雛も低温には弱い。人が入ると飛んでしまふ親もいるので、タイムリミットを決め、あまり気温が低い時には入らないなどのルールを決めた。

乳白色の卵は貝殻にうまくカムフラージュされて、人目にはどこにあるのかわからない。ペンキ区画の卵を探すのも大変だった。

卵は一日一個、日の出の頃に産み落とされるという。ヘビやイタチなどがない屋上営巣地で卵を食べに来るのはカラスだけである。穴をあけてきれいに中身だけを吸いとる。中身のなくなった卵は風に吹かれていつのまにかなくなっている。

カラスは屋上のフェンスにとまり、しばらく様子をうかがいながら狙いを定めては舞い降りる。その瞬間、間髪を入れずに親鳥がいつせいに飛び立ち、身を挺しての猛追の総反撃が始まる。カラスがたじろいでいるすきに他のカラスがやってきて卵をさらっていく。親鳥の少ない営巣初期にはこういった場面をよく見かけた。

この季節はカラスも雛を育てている最中だ。それぞれのつがいが大きなたリトリを持っていて、縄張りに入ってくる若いカラスの群れを追いはらう。営巣初期に多くのカラスに襲われて壊滅的な打撃を受けると、その年の営巣を諦めるだけでなく、何年も営巣をしないことがあるそうだ。この時期、近隣で子育てをしているカラスは歓迎すべきと言っても過言ではない。

営巣を始めてから3週間もたった6月中旬になると次々と雛が卵から顔を出した。丸裸の雛はちよつとグロテスクだが、30分もたたないうちに日に日に強くなった日差しが雛の体をあつという間に乾かしていく。羽毛が綺麗にそろい可愛い姿を見せ始める。

抱卵や子育ては他のコアジサシに安全な場所であることを知らせるようだった。営巣地を探して流離っている親鳥が次々とやってきて、この頃には約2000羽もの大コロニーとなっていた。

梅雨の雨がぼつりぼつりとスラッジライトにしみ込んでいく。雨はいつの間にか大粒の雨滴になり、排水が悪い営巣地をたちまち水浸しにした。雛も卵も低温には弱い。厚さ3cmのスラッジライト区画では水に浸かる卵や、流される雛の姿が見られた。河川の玉砂利河原などでは大雨の増水で雛や卵がいつきに流されてしまうことがある。

何日かして雨が上がり、初夏の陽射しの営巣地に出かけた。そこには雨水をたっぷり吸い込んだスラッジライトの上であおむけになって死んでいる雛がいた。卵の殻を破ったまま命を落としたものや親鳥が運んできたカタクチイワシと並んで干か

らびているものもいる。死んだ雛と並んで生きている雛がいた。死んだ雛や卵をビニール袋に入れながら升目ごとに数を数えた。排水口には枯れ枝などと一緒に雛が重なって死んでいた。

水没で死んだ卵を持ち帰って標本を作ろうと注射針を差し込むと物凄い悪臭が鼻をついた。

猛暑、水害、強風、天敵と、屋上に作られた人工営巣地にも自然界の過酷な現実がある。

2002年6月29日の調査結果を見ると総営巣数503巣、総卵数984卵、放棄された卵79卵、雛の数350個体、死んだ雛80個体さらにシロチドリやコチドリの営巣数なども記録されている。

林レンジャーを中心に行われた営巣調査は雨後の低温を考慮して、炎天下に行われることが多かった。2人一組になって468区画もあるレンガで囲まれた柵の中を5〜6人が一列になって移動する。

貝殻やペンキで卵はカムフラージュされているし、雛は人が近づくと固まって動かなくなる。卵や雛を踏みつけないことに最大の注意が払われた。

放棄された卵か新しく産み落とされた卵かを即座に判断。シロチドリやコチドリの卵もよく似ているからちよつとした模様の違いをしっかりと頭にたたきこまなければならぬ。親鳥がキリッキリッと威嚇の鳴き声で頭上を旋回し、糞をかけてくる。猛暑。おまけに制限時間内に終わらせるといふ制約が皆の頭を混乱させた。それでも可愛い雛がいると、一瞬すべてから解き放されて見入ってしまう。

いつもは激を飛ばしている元気な田中さんが足元から崩れ落ちるようにスラッジライトの上に倒れた。熱中症だ。白目が天を向いて、それは穏やかな顔だった。抱きかかえるとしばらくして意識をとりもどし、水を一杯ぐりと飲んで作業を続けた。巨漢の中瀬さんは汗を流しながら、アラビアのロレンスマがいに手ぬぐいで顔を覆い、記録用紙にむかっていた。レンガに書き込む記号は悪筆か疲れか、読み取れないものもあった。

営巣調査と共にコアジサシが落としていった魚も資料として皆で採取した。魚が専門の中瀬さんに同定をお願いすると、東京湾の表層に群れをなすカタクチイワシが多く、次に浅瀬にいるボラ、ハゼの稚魚の順に多かった。時には真っ赤なエビやサヨリの稚魚までいた。

その頃、予想もしていなかったことが起きた。猫の侵入である。屋上に猫はいないはずだった。雛の多くは食べられず、なぶり殺されていた。

猫の足跡はいたるところに残されていたが、おおよその潜入ルートは解明された。建物のまわりにパイプなどの構造物が多い下水処理場である。そこからジャンプして入ってきたようである。

帰りがけに水再生センター内を歩いてみると猫がたくさんいて、餌をやっている人もいた。猫が上がれそうな足場もたくさんあった。これは盲点だった。



屋上に潜んでいるはずの猫をくまなく探したが見つからなかった。ある日なげなく排水溝の中をのぞくと、暗闇のなかにひっそりと黒い猫ががんでいる。

捕まえようと意気込んで近づくと脱兎のごとく軽々と屋上のフェンスをジャンプして逃げて行った。二度目に遭遇した時は二手に分かれて迎え撃つ作戦に出た。抱きかかえるように捕えたが猫も恐怖であれば、こちらがひるんだすきに逃げられた。しかしその日を堺にそのシーズンは二度と猫はやってこなかった。

2002年の猫の被害は約150羽である。翌年の整備で、スロープの上がり口になりっぱな猫除け扉が出来たし、足場になりそうな所には猫がえしがつけられた。それでも上がってくる猫がいたのだから、その執念たるや相当なものである。

7月も半ばになると丸くて可愛い雛もいつの間にかすつきりとおにいさん風になり、羽をはばたくしぐさを見せ始めていた。飛ぶ練習なのか、餌をくわえた親鳥につられて幼鳥がぎこちなく飛んでいく。

『飛ぶってこんなにスゴイこと！舞い上がった上空から営巣地が小さく見えた。そのまわりにはお日様の光に反射してキラキラと輝く海が広がっている。』

お母さんと一緒に干潟におりてみた。冷たい海水の感触が気持ちいい。』

次々と飛び始めた幼鳥は親鳥と一緒に森ヶ崎の鼻干潟に集まり始めていた。日毎にその数は増えていき、お彼岸を過ぎたある日、すべてのコアジサシは営巣地から姿を消していた。雛も卵もどこにも見当たらない。まばらに草が生え、静まり返った営巣地は秋の気配を感じさせた。



産まれて1週間位の雛



水没寸前の卵



屋上にやってきた黒猫

この時期、各地で営巣していたコアジサシたちは千葉の小櫃川河口干潟付近に次々と集結するという。その数1万とも2万とも。そして越冬のためにオーストラリアやニュージーランドに約1万キロもの長い旅に出る。

その年飛来したコアジサシは約2000羽、総営巣数は1224巣、総卵数は2665個、孵化した雛の数920羽、屋上営巣地から巣立った幼鳥は606羽という昨年の5羽が嘘のような数字だった。

森ヶ崎の鼻干潟は日本を通過して南へ向かうシギやチドリたちで賑わっていた。彼らは繁殖地であるシベリアなどからの帰路、中継地である日本を通過する。この

あたりもかつては空を覆うほどのシギやチドリが見られたに違いない。

そんな9月のはじめ、スロープを上がると屋上でピュルピュルという鳴き声が聞こえてきた。双眼鏡でのぞくとフラットなコンクリートの上にシロチドリが55羽も羽を休めている。満潮で干潟が冠水してしまった時の避難場所なのだろう。さらに空港側には同じチドリの仲間で大形のムナグロが33羽もいた。無機質な空間にたたくチドリたちは行き場を失って放浪しているようにも見えた。そっと近づいてみたが逃げる気配がない。チャンスだとカメラを向けると一斉に飛び立った。

シギ、チドリのピークが過ぎた頃、私達は来年の営巣のため、閑散とした営巣地で草むしり作業に汗を流した。今、どのあたりを飛んでいるのか。風雨も乗り越えて無事にたどり着いて欲しい。

秋も深まり風も冷たくなった頃、山階鳥類研究所から奇跡的な吉報が届いた。足環をつけた若鳥がニュージーランドで見つかつたのである。しかも2例目。それも目視による読み取りだという。どんな動物視力を持った人なのか。望遠鏡で足環の小さな記号を読みとってくれたのである。

この年の成果を受けて9月に国土交通大臣賞が東京都下水道局、大田区、リトルタン・プロジェクトの三者に授与された。また日本野鳥の会の会誌「野鳥」で特集が生まれ、さらに「日本鳥学会」で林レンジャー、早川さんを中心に成果が発表されるなど野鳥の専門家の間でもこのプロジェクトが話題になった。

オーストラリアやニュージーランドの研究者との交流も始まり、アカデミックな雰囲気も芽生え始めた。

そんな頃、以前から交流のあった日本鳥学会の会長であり、東京大学大学院教授の樋口広芳氏や明治大学教授でコアジサシ同様河原の裸地で生き、絶滅が危惧されている植物、カワラノギクの研究に携わる倉本宣氏が次年度からの調査研究に参加することになった。屋上営巣の本格的な研究が始まることになったのである。

今シーズンの成果や問題点をふまえて次年度整備に関する会議が年末に森ヶ崎水再生センター、大田区、リトルタン・プロジェクトの三者の間で話し合わせ、水害対策のコンクリがらでの嵩上げや、コンクリがらだけの0.8ヘクタールの営巣地拡張が決まった。

## 2003年、草原化とカラスの総攻撃

夏鳥と冬鳥が入れ替わるころ、昨日までいたカモやカメが突然姿を消して、閑散とした干潟が残される。

運河で囲まれた水再生センターの岸壁に打ち寄せる波は、たいていプレジャーボートなどが作る人工的な波だ。波がひくとたくさんのボラの稚魚が泳いでいる。棒杭の上ではカワウがのんびりと羽を広げて春の日差しを浴びていた。

そんなのどかな風景とは裏腹に僕の心中は穏やかではない。今年もコアジサシが

来てくれるだろうか。

猫除けの大きな扉が閉め切られた営巣地は閑散としていた。すでに営巣を始めているシロチドリの姿がチラホラ、気配を察知したのかピュルピュルと鳴きながら飛び去った。コアジサシばかりに気をとられていたがシロチドリの屋上営巣は日本初の事例だという。

4月も中旬にさしかかり、いつものようにコアジサシを迎えるために干潟の上空を眺めていると、着陸するジェット機の手前に小さく白いものが懸命に羽ばたいている。双眼鏡を取り出して位置を合わせる。「コアジサシだー！」いくつもの小さな白い編隊が、干潟の上を舞い始めた。

2003年の営巣は順調に始まった。いくつかの改良が功を奏したのか、約400羽ものコアジサシが飛来し、遠くから見ると蚊柱がたっているようだった。次々に卵が生まれ、そのすぐとなりで雛が生まれるほどの過密さである。望遠鏡で見ているとなわばりに入ってきた雛を激しくつついて追い払う親がいる。死んでしまうのではないかと心配するほどだ。

猛禽類のチョウゲンボウやハヤブサが雛や親鳥を狙ってやってくる。数百羽の親鳥が一斉に飛び立ち、果敢に追い払う。その一軍は変幻自在に姿を変え、うねる白い龍のようにも見えた。魔王のハヤブサは威嚇する親を襲い、その命を奪う事もあるという。

7月初旬にコアジサシの営巣数はピークに達したが、じわじわと押し寄せてくるものがいた。それはこの数年間にスラッジライトに堆積された植物の種子である。種子は風に乗ってやってくるが、梅雨の恵みを受け、一斉に発芽し始めたのである。コアジサシに棄てられた魚や糞などで土壌も肥料たつぷり。

すでに巣立った幼鳥もたくさんいたが、スラッジライト区画では巣穴が掘れないほどに草原化が進んでいた。遅れてやって来たコアジサシには0.8ヘクタールのコンクリがら区画が残されているだけとなった。

草原化に追い討ちをかけたのが、7月17日から始まった、ハシブトガラスの総攻撃である。周辺のガラスの雛も巣立ち、なわばりがとけた時期である。若い60羽ほどのガラスが、フェンスに陣取って、果てはシェルターを数羽がかこい、雛が出てくるのを待っている始末。ガラスに体当たりする親鳥もいたが、なすすべがない。ガラスの群れの襲撃は一週間にもおよんだ。彼らが去った後には1羽の雛も卵も見つけることが出来なかったのである。

悪夢の一週間が過ぎ、残された草原にはスズメやカワラヒワの群れが訪れていた。フェンスの上にはガラスが吐き出した未消化物（ペリット）の団子が並んでいた。中には雛の羽毛や骨と一緒に甲虫類の緑色の甲羅もあった。学生が観察用に回していたカメラには雛をくわえてふてふてしく歩いているガラスの様子が撮影されていた。それでもこの年巣立った幼鳥は1600羽で、昨年をはるかに上回っていた。

木枯らしが吹き始めた頃、学生と一緒に地温を計っていた温度計などを回収に行

った。青々とした草原も枯れ野となっていたが、地面に据え付けられた温度計はなかなか見つからなかった。草をかき分けていくとフワッと宙に浮いたものがある。見上げると鼻の仲間のコミミズクだった。「こんなところに！」。

学生の頃通ったこのあたりの埋立地でもとりわけ印象深い奴。フェンスの隅にとまったところを双眼鏡でじっくりと見た。お面をつけたような懐かしい顔がこちらを見つめている。機嫌が悪そうなのは眠りをさまたげたためらしい。

どこからか数羽のカラスが追いかける。かわしながら青空に舞い上がったコミミズクはいつの間にか点になっていた。しばらく旋回していたが、青空に吸いこまれるように消えた。夜行性の彼らも休息場所がないのだろう。様変わりした無機質な埋立地の風景を見つめなおした。

## 2004年、「プランタンの森」を探そう

2ヘクタールもの大草原を更地にするには、大勢のボランティアの手をかりなければならぬ。新聞各社にいち早く情報を流し、取材をお願いした。

各社、それぞれ切り口は違うが「ボランティアが集まらない」という文脈でお願いした。ある紙面では「鳥インフルエンザの影響か」などという意味不明の見出しもあったが大手三紙に記事がでたことで「THE DAILY YOMIURI」まで取材に来て写真入りの大きな扱いになった。

新聞の効果は大きく、日毎にボランティアの応募は増えていった。しかし運の悪いことに2日間は雨になり、冷たい雨の中での作業になった。それでも最終日の4月11日にはさっぱりと床屋に行ったような更地が出来上がった。過去最高の、のべ450名もの大ボランティア作業だった。

誘引効果のあるコアジサシのデコイ（木彫りの模型）を設置し、鳴き声も流すことにした。

「これでコアジサシが迎えられる」とほっとしたのも束の間、春雨の恵みで2週間後には芽生えが始まっていた。草むしりは抜いた草の種を撒き散らし、耕しているようなものだ。でもこんなに早いとは。

営巣地探しの偵察部隊がやってくる4月の2週目頃には芽吹いた草で営巣地はうっすらと青みを増していた。

それでもコアジサシが14、5羽やってきては上空を旋回して様子をうかがっていく。時には降りて、デコイに求愛給餌するものまでいた。カラスもやってきてデコイを倒したかと思うとひとつさらっていった。

5月中旬になっても営巣の兆しがないので早川さんに現場を見てもらった。その日も曇天の今にも雨滴が落ちてきそうな暗い日だった。早川さんは草の生えた現場を見るなり「これはまずいね、巣穴も掘れないし、これ以上草丈が伸びれば視界もさえぎってしまう」と言った。

それでも0.8ヘクタールのコンクリがら区画が残っている。望みをつないだが下旬になっても営巣はなかった。ところが対岸の羽田空港に出来た更地では200羽ほどのコアジサシが舞っている。むこうで営巣を始めたのだろうか。営巣地に足を踏み入れると若草色のバッタが跳ねた。テントウムシもいた。ここは昆虫の楽園になりそうだ。あるいはヒバリの営巣地か。僕は曇天の空を眺めながらコアジサシが舞っている青空を思い描いた。しかし気がかりなのは営巣地を訪れていた皆さんのコアジサシがどこに消えたのだろうかということ。近隣の埋立地などを探し回ったが、営巣地は見つからなかった。



草原化する営巣地を襲ったカラスの群れ



近隣中学生の草むしり作業



炎天下の営巣調査

唯一、多摩川の第三京浜上流の中州で営巣しているという話を聞き、見に行つた。長年そこで観察を続けている沢村信之さんに連絡をとり、案内してもらつた。二子玉川にほど近い中州は玉砂利河原の原形をとどめ、約90羽程のコアジサシが営巣していた。

戦後すぐアメリカ軍が日本全土を空撮した中に多摩川の写真もあり、青梅あたりから下流は玉砂利の白い河原であった。そこには大きな営巣地も存在していたに違いない。

玉砂利河原はダムが出来たため、山から石が供給されなくなったことと川の氾濫が抑えられて泥が堆積するようになったこと、そして流域の開発で土砂が川に流れ込んだこと、さらに大量の採石が行われたことなどが消失の原因とされる。

沢村さんは「昨年は大雨で雛が流されてしまったため、巣立ちはずゼロ。国土交通省に話をして、嵩上げした礫地を川の中に作ってもらったが、いつもの中州で営巣している」と話してくれた。人間の思うようにはいかないようだ。

7月4日、シーズン最後の観察会で1ペアが営巣しているのを参加者全員で目撃したが、その翌日にはカラスに卵がさらわれていった。

そんな矢先、思いがけないニュースが飛び込んだ。千葉の浦安で2002年に足輪をつけた森ヶ崎生まれのペアがアスファルトの駐車場で営巣しているという。7月中旬私たちはその営巣地を見に行くことにした。

その日も炎天下で、アスファルトには陽炎がたっていた。2001年の屋上のように。近所に住んでいるスタッフの松岡さん一家が卵が転がらないよう巢のまわりに砂利を敷いたのが功を奏して、同郷のペアはすでに雛をかえしていた。親鳥の足には森ヶ崎でつけた銀色のリングが光っていた。幼鳥にもすでに足輪がつけられており、同行したスタッフも孫を見るような思いだったろう。

山階鳥類研究所の茂田良光氏は「同じ場所で生まれた2羽がペアをつくり、生まれた近くに戻って繁殖したのは国内で報告例はない」「頻繁に相手を変えるかなど分からないことが多かったが、生態解明への第一歩を踏み出した」とコメントしている。

内房、外房と長い海岸線を持つ千葉にはかつてたくさんの営巣地があったと聞いている。

しかしここでも埋め立てやレジャーなどで営巣地は激減しているそう。浦安の駐車場をあとにして千葉の営巣地に詳しい北村君を先頭に営巣地をめぐるところにした。

かつては人工スキー場で名を馳せた船橋の「ザウス」跡地。ここはかなり広い。簡易ではあるが、刑務所のような高い塀で周囲が覆われ、猫が入る隙間もなさそう。唯一、車が入りするとびら付近から望遠鏡で中を覗く。裸地のむこうに青々と草地が見える。白い翼がかたまつて蠢くように見える。コアジサシだ。時々一斉に飛び、その数がわかる。1000羽はいるだろうか。近くに行けばたっくさんの雛や幼鳥が見られそう。檻の中にとじこめられ、まさに絶滅危惧という言葉があてはまるような光景。営巣が確認されてからホームセンターの工事が延期されたが、来シーズンには立派な建物が建つ予定だ。

習志野市芝園の営巣地は街の中にエアポケットのように出来た裸地。有刺鉄線で囲ってあるだけの広さ約2ヘクタールに600羽ほどが生息。人が近づいても入れないことを知っているかのようだ。可愛い雛が近くで見られるので近所のおじさんがカメラを持って撮影に来たが、通りがかる人はあまり関心がないようだ。

検見川浜の海浜公園は埋立地に作られた人工海浜である。ウインドサーフィンなどマリンスポーツを楽しむ人々で賑わっていた。そのそばにロープが張られた一画。広さは1ヘクタール。『千葉市の鳥・コアジサシが繁殖しています。立ち入ったりせず、静かに見守りましょう。千葉市環境保全部環境保全推進課』という看板が立てられていた。検見川浜の保護区では約200羽がロープの中で細々と営巣していた。波打ち際に群れている幼鳥は浜風を受けてとても気持ち良さそう。お母さんと一緒に水平線のかなたを見つめ、やがて来る長い旅立ちに思いを馳せているようだった。

私たちは広大な葦原が広がる利根川河口付近を越え、茨城県に車を走らせた。目指すは波崎海岸。向い風が強くなって砂が窓ガラスにあたる。防風林の脇に車を停めて小高い丘を登りきると、白い波頭が幾重にも重なって壮観だ。鹿島方面には風

力発電の白いプロペラがいくつも並んで見える。

上空でキリッキリッとコアジサシの鳴き声がする。どうやら僕たちを威嚇しているようだ。強風にもめげず、小さな体が風に乘っている。打ち寄せられた貝殻の砂浜を横一列になつて巣を探すことにした。白く風化した貝殻は卵をうまくカムフラージュしている。それでも「あつた！」と叫ぶ声が聞こえた。一斉に走り寄る。巣穴というより二枚貝のかけらのなかに卵がふたつ。すぐ近くまで波が打ち寄せていた。

自然の営巣地はすべてが美しくのびやかな印象だ。屋上営巣地にも貝殻を持って帰りたくなつた。

しかしこんなところにも人間の脅威が押し寄せていた。砂浜を疾走するジープである。轆かれた幼鳥は。ペシャンコにつぶされ、干からびていた。両手でつつむと轆かれた時の叫び声が聞こえてくるようだった。巣のそばにもいくつもの轆があり、踏み潰された卵もたくさんありそうだ。人間の想像力と優しさの欠如。それが、ここでも彼らを追い詰めている。

漁港を作るため、浚渫土砂を積み上げた波崎漁港の営巣地は3000羽もの大きなコロニーだった。しかしそこも工事中にできたつかの間の営巣地だ。

銚子を迂回して、飯岡灯台そばの営巣地に到着。忘れ去られた小さな岬のような砂礫地には太平洋の荒波が岸壁を打ち砕く。もう日没真近だ。急がないと東京へ帰れなくなる。九十九里の海岸沿いに車を走らせていると、北村君が思い出したように「ちよつと車を停めて」との指示。言われるままに国道から草地を入っていくと上空を飛来する大きな群れが樹林帯の中に入っていく。双眼鏡で覗くと亜麻色が美しいアマサギや純白のダイサギやコサギ、青みがかつたアオサギが次々に飛び込んでくる。サギのねぐらだ。薄暮の松の緑に大きなダイサギの白さが映えた。日没も近い。一日のクライマックスにふさわしい幻想的な絵だ。

海が近いようなので海岸まで歩いてみた。もう満月が顔を出している。水平線の彼方にコアジサシの越冬地がある。彼らの旅立ちももうすぐだ。

千葉や茨城の営巣地めぐりは追い詰められたコアジサシを再認識する機会となり、ダイナミックな自然の中で生きるコアジサシに目が洗われる思いだった。



千葉の海岸の営巣地視察



卵の向こうに波頭が見える



ジープに轆かれた幼鳥

## 2005年、ふたたび森ヶ崎で

森ヶ崎に帰ってみるとコンクリートに囲まれた屋上営巣地がなんだか哀れに見えた。

2005年1月、屋上営巣地のフェンスに滑り台のようなものが取り付けられ、スラッジライトを屋上から撤去する作業が始まった。そこに新しくコンクリがらを敷きならし、さらに未整備部分には天然砂利を敷き、営巣地全体が6・2ヘクタールに拡張されることになった。信じられなかったが水再生センターも草原化した営巣地を放置しておくわけにはいかなかったのだろう。

スラッジライトがなくなりコンクリート剥き出しになった営巣地は2001年夏の炎天下を彷彿とさせた。あれから5年が過ぎようとしている。静まり返った灰色の屋上に僕の影が大きく写り、そこで起きた様々な出来事が夢のように思えた。

2002年以来の大規模改修工事が始まる。

4月24日夕刻、屋外スピーカーの設置をしていると突然雷鳴のようにコアジサシの鳴き声が出た。キリツキリツと。「空耳かな」鳴き声だけで姿は見えない。そばにいた北村君も聞いたと言った。この時期コアジサシはるか上空を飛ぶことが多い。採餌の場所、営巣地などを探しているのだろうか。1年ぶりに聞いた鳴き声に「やっと来てくれた」という思いがこみあげてきた。

5月7日夕刻、谷津干潟で録音されたコアジサシの鳴き声をスピーカーで流し始めると、どこからともなく数羽のコアジサシが舞い降りてきた。デコイ周辺を低空で、静かに踊るように旋回する。スピーカーのそばで私達は呆然と眺めていた。その姿はなにか神聖な儀式のようだった。

5月9日には最大で約80羽がデコイ周辺に舞い降り、誘致作戦のスタートはうまくいっているようだった。しかしその数日後、営巣地で意外なものと遭遇する。猫の足跡である。

猫の糞と足跡は2002年に150羽の雛や幼鳥が殺傷された記憶を甦らせた。なわばりのマーキングをつけるために浸入してきたのだろうが、屋上の周囲は猫がえしがつけられているはずだ。半日かけて痕跡を探したが見つからなかった。

まさかと思ったが隣接した建物の屋根に上がってみた。そこから下を見下ろすと垂直な白い壁を猫がけ上がった足跡があった。3mはある。屋根から屋上に平行に走っているパイプにさらにジャンプして、パイプにも足跡がついていた。猫の執念も凄まじい。センターの人も驚いていたが、すぐに網を張ってくれた。

猫の一件が解決してどっと疲れが出た。もうやり残したことはないか。

5月16日に約500羽のコアジサシが屋上営巣地をねぐらにしているというニュースが入った。

さっそく翌日に営巣地に入り、全体が見わたせる観察棟に上がった。北東の風が



ちよつと肌寒かったがまだ明るい。18…40、にわかには上空がコアジサシの鳴き声で騒がしくなった。茜色の夕焼けを背景に40〜50羽の群れが次々と営巣地に入ってくる。デコイ周辺に舞い降りたものはデコイに寄り添っているように見える。降りてすぐに飛び立って周辺を旋回してはまた入ってくる。ねぐらに入った直後は落ち着かないようだ。鳴き声で喧騒となり、なにかおしゃべりをしているようだ。ヒヨドリが日没前に激しく鳴き叫ぶように、陽が沈む前は不安にかられるのだろうか。

あたりが暗くなったがデコイ周辺には100羽ほどが集結しているようだ。19…00前後には鳴き声もほとんどやんだ。さらに暗くなってからも100羽ほどの群れが入ってきた。この日カウントしたねぐら入り数は345羽。暗いので見落としがあるだろう。

いつの間にか羽田空港のイルミネーションが輝きを増していた。コアジサシはねぐらを転々と変えるらしい。この群れがこのまま残ってくれば。

今年の初卵確認は5月22日だった。それもデコイのすぐ脇に産んでいて、まるでデコイが産んだようだった。その卵も翌週にはカラスに食べられていた。コアジサシはデコイをたくさん置いたコンクリがら区画ではほとんど営巣していない。圧倒的に天然砂利を敷いた拡張区画での営巣だ。卵を抱えている親鳥を見ると羽のグレイが天然砂利の色にうまくカムフラージュされている。コンクリがらは下地が白いので卵を抱いてもやはり目だってしまう。親鳥がいなくなるとすかさずカラスがやってくる。コンクリがらは硬く粉っぽい。金属片やガラスも混じっている。やはり素材の良さで、天然砂利を選んだのだろうか。

今シーズンは400羽ほどの営巣でそう多くはない。来年はもっと来てくれるだろうか。

緑を増やすことに異議を唱える人はいない。しかし裸地を作ることにはなかなか理解しがたいだろう。そこで繁殖するコアジサシやシロチドリ、コチドリという水鳥達が生きる空間、そこは干潟であり、湿地、砂浜や玉砂利川原というかつては普通に存在していた自然の一角だ。そこは多くの生物が生きる空間でもある。

それらがうまく連携してひとつの生態系が出来上がっていた。失われた空間を取り戻すシンボルとしてコアジサシがキーワードになり、夏の訪れを告げる妖精のような姿を見失わないためにも「リトルターン・プロジェクト」は物語を続けなければならぬだろう。

終わり

